

私と姉さんと召喚獣 リメイク版

秀吉組

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

処女作の私と姉さんと召喚獣のリメイク版です。前のとは少し設定が違う所もある
のでご注意ください。リハビリもかねて書くのはどうか寛大な心でどうかお願ひしま
す（汗）

第
2
話

目

次

7 1

第1話

「ここが文月学園か」

校舎へと続く両脇を桜が咲き誇つて いる坂道を上るとその建物はあつた。

今日から私が通う学園、私が大好きな姉さんが通う学園、そして……

私を励まし生きる希望を与えてくれた人、私の初恋の男の子がいる学園……

君は覚えていてくれているのかな……私のこと……

それとも忘れちやつたかな？

生徒手帳にこつそりと忍ばせて いる一枚の写真を見ながら校舎の入り口に入ろうと

した時

「そこのお前、ちょっと待て」

そう呼ばれ、振り返つてみると

浅黒い肌をした短髪のスポーツマン然としたマツチヨさんがそこにいました

「あ、あの、ど、どちら様でしようか？」

いきなり現れたこのマツチヨさんは一体どなた？

「ああ、驚かせます。俺は西村 宗一、この学園の生活指導担当の教師だ。
編入してきた霧島夢希だな？」

お前が

まさか出会い早々一発目からこんないかにも戦場で一騎当千で戦つていそうな濃い
先生に会うとはさすが文月学園……

普通の学校とは一味違うということですか……

「うん？ どうかしたか？」

「い、いいえ！ なんでもないです！ き、霧島夢希です……。よろしくお願ひします」

「？ まあいい。ほれ、編入試験の結果だ」

先生が懐から封筒を取り出し、私に差し出してくる。宛名には「霧島夢希」と書かれ
てあつた。封筒を開け紙を開くとそこには

「霧島夢希 Aクラス」

と書かれていた

「私がAクラス？ 本当に？」

Aクラス、それはその学年で優秀な成績を収めている生徒が集まるクラスつまり、その学年の最高クラスだ

「何かの間違い、とかじやないですよね？」

「安心しろ。何の間違いもない、Aクラスだ。お前の姉と同じクラスのな」

そう言われた途端、私は嬉しさの余り顔が綻ぶのを抑えられなかつた

できれば姉さんと同じクラスになりたかつた

だけど文月学園のことをネットで調べていくうちにそれはとても難しいことだとうことが判つた

正直一度は諦めようとした

でも昔、彼が言つてくれたあの一言を思い出し諦めずにここまで来た
そして今日、その結果が今、目の前にある

「うちの学園でAクラスに入るというのは並大抵の努力では難しい。だがお前はそれを
乗り越えこの結果を出したんだ。胸を張れ霧島」

私の肩に手を置き西村先生はそう言つてくれた

「はい！」

「うむ。では学園内を案内するのでついてきてくれ」

そう言われついていこうとすると「ああ、そうだつた」と西村先生がこちらに振り

「ようこそ、文月学園へ」

こうして私の学園生活第一日目がスタートした

第2話

西村先生について行くと職員室の前に案内された

「職員室には担当の高橋先生が居られるので、後は高橋先生の指示に従うように」

「え？ 西村先生がこのまま案内してくれるんじやないんですか？」

「そうしてやりたいのも山々なんだがな……」

そう言つて先生は懐からさつきの試験結果が入つた同じ封筒を取り出した

「これを渡さなきやならんバカが一人いるのでな。すまんな」

西村先生は一つの封筒をヒラヒラさせながら去つていった

私は去つて行く西村先生に一礼すると職員室の扉を開いた

「し、失礼しまーす」

「お待ちしていました、霧島夢希さん。私がAクラス担当の高橋洋子です。よろしくお願いします」

職員室に入るとそこには髪を後ろでお団子状にまとめ、眼鏡をかけてスーツをきつちり着こなした知的女性の代表のような先生がいた

格好いい女性だな……

今はコンタクトしているけど家では私もメガネを掛けることのほうが多い。けどあそこまでは決まらない……

「ん？ どうかしましたか？」

「ふえ？ あ、いいえ！ 何でもないです!! 霧島夢希です、よろしくお願ひします」

いけないいけない、考え方すると周りが見えてないな私……

「そこのソファーに座つて楽にしてください。ふふ、そう緊張しなくてもいいですよ。」

「あ、はい……」

緊張してるのバレバレだし……。 しかも気を使つてもらつてるし、うう、恥ずかしいな……。

「では簡単にこの学校について説明しますね」

「はい、お願ひします」

私は高橋先生からこの学校の特色、自身の召喚獣のこと、その召喚獣を使って行う試験召喚戦争、そしてその戦争の勝利のメリットと敗北した時のデメリットの説明を受けた

「では、そろそろ教室のほうに移動することにしましよう」

「は、はい」

先生に連れられ階段で二階に上がるとそこには厳しい現実があつた

端からまるで廃屋みたいな教室、木造の教室、一般的な教室、隣の教室より倍近くあるだろう教室、そして今日の前にある明らかに普通とは違う雰囲気を醸し出している教室

生徒の成績によつて待遇の違う教室に振り分ける。このように目に見える形で

……

それがここ、文月学園の方針だつた

確かにこの授業料はみんな一緒だつたような…。それでこんなにも待遇が違つてたら不平不満も出るだろうに

「では、外で待つていて下さい。Aクラスの生徒と少し話をしたら呼びますので呼ばれたら入つて来て下さい」

高橋先生はそうとAクラスに入つていつた。しかし何だろうこの広い教室にこの設備は…：

教室の窓から見えてきたのは壁を覆うほどのプラズマディスプレイにノートパソコンに冷蔵庫、リクリエーティングシートなど他にも色々な設備がありそれはまるで高級ホテルのようだつた

啞然としている所に「どうぞ、入つてきて下さい」と高橋先生の声が聞こえた

「さて、いよいよだ……」

私は緊張ながらも教室の扉を開き、中へと入った

たくさんの中の視線に耐えながら先生がいる教壇に向かい、前を向くとその人物はいた

「夢……希……？」

た

普段はあんまり表情を出せないけどこの時は見事なくらい顔に驚きの表情が出てい

私はそれを見ると思わず笑みがこぼれた

久しぶりだね、姉さん♪

「それでは自己紹介をお願いします」

「はい。
す！」

今日から文月学園に編入してきました霧島夢希です。

よろしくお願ひしま